

社会保険労務士 長沢 有紀さん 上



近では、精神疾患による休職や新型インフルエンザについての相談も多い。年末を控え、一丸となり奔走している。

「一生働きたいと考え、社の著名な社会保険労務士事務

事で自己実現をしたかったのです」。退職に迷いはなかつた。

一流になるためと、都内講師のアルバイトをして何とかしのいだ。

つい弱気になることもあつたが、「実行する勇気がなく、何もしないであきらめるのは、自分のプライドが許せませんでした」。人脈を広げるために、異業種交流会にも顔を出し、種をまいた。「雇用にかかる問題は、誰にとっても一大事。それだけに、人相手の仕事に生きがいを感じています」と話す。

(明日に続く)

全国最年少で事務所開く

全国最年少の25歳(当時)で社会保険労務士事務所を開設してから16年目。埼玉県内の事務所では、職員4人と机を並べる。顧問契約を結んでいる企業は約100社あり、30~50人規模が多い。残業代や解雇問題に関する労使トラブルが非常に増えている。最

後に「23歳、2度目の受験で合格し、直後に辞表を出した。上司からは資格で食べていけるほど世の中は甘くない」と言われ、親には「銀行員だった23歳、2度目の受験で合格し、直後に辞表を出した。上司からは資格で

にして」と泣かれた。当時の職場は結婚や出産を機に退職するのが慣例だった。「20年、30年後を見据え、仕事の門をたたいた。生まれて初めて一人暮らしをしながら、仕事のイロハを学んだ。25歳で事務所を開設したものの、顧問先を開拓できず、半年間は仕事も収入もなかった。」「一円を稼ぐ厳しさが身

輝く女性

会保険労務士の資格を取得しました。同僚がお花やお茶を習っている時に、自分を高める手段として勉強に打ち込みました」と振り返る。

銀行員だった23歳、2度目の受験で合格し、直後に辞表を出した。上司からは資格で食べていけるほど世の中は甘くない」とと言われ、親には「銀行員だった23歳、2度目の受験で合格し、直後に辞表を出した。上司からは資格で

（略歴）1969年東京生まれ。共立女子短大卒業後、信託銀行の支店に勤務。社会保険労務士資格取得を機に退職。著書に「女性社労士 年収2000万円をめざす」（同文館出版）があり、来年新著を出版する予定。1男と2女（双子）の母である。